

教員人生のスタートを振り返って

酒井 亜也子

(教育・平成4年卒・三木町立白山小学校)

香川大学を卒業し、気づけば30年以上の月日が流れている。今振り返ると、私にとっての教員人生のスタートは、教育実習の4週間だったように感じる。それは、教師という仕事の奥深さと温かさを全身で感じた、かけがえのない時間だった。

最初は緊張感しかなかったが、6年生の学級での実習であったため、毎年やってくる実習生の扱いにも子どもたちは慣れており、気軽に話しかけてくれた。明るい笑顔で迎えてくれたことで、少し肩の力が抜けた。それでも、初日は大変な疲労感で4週間やっていけるのかと不安になった。そんなある日の放課後、図書室をのぞくと、一人の6年生が、黙々と自動車製造についての資料を読みふけていた。聞くと、将来、自分で自動車を造ってみたいくてその方法を調べているとのこと。たくさんの資料を山積みになっている姿は、まるで研究者のようだった。その姿に、子どもがもつ探究心の強さを感じたのを覚えている。子どもたちは授業だけでなく、こうした「好きなことに没頭する時間」の中でも大きく成長しているのだと気づいた瞬間だった。

また、担当教官の教材研究に加わらせてもらい、社会科の授業で使う金閣寺の模型を一緒に作ったことも忘れられない。屋根の角度など、細部にまでこだわって数日かかって作り上げた。ふと外を見ると真っ暗になっており、実習生仲間と焦って片付けをし、教室を閉めたこともいい思い出である。完成した模型を使って、子どもたちが生き生きと学ぶ様子を見て何とも言えず嬉しかった。教材や教具にも教師の思いと工夫が詰まっていることを実感した。

実際の授業では思うようにうまく指導ができず、子どもたちの反応に合わせて柔軟に動くことの難しさを痛感した。子どもたちの表情から「わからん！」という気持ちが想像でき、大変悔しかった。どうすれば、「わかった！」と言ってもらえるのか、どんな支援をすればよいのか、試行錯誤の4週間だった。

そして迎えた最終日。朝から胸がいっぱいで、子どもたちに会えなくなる寂しさで泣きながら学校へ向かった記憶がある。「いい先生になってね。」とたくさんの応援メッセージももらった。4週間という短い教育実習を通して、私は子どもたちに様々なことを教えてもらった。学ぶ姿勢、人と関わる温かさ、そのすべてが、私を教師へと導いてくれた。だからこそ、心から「ありがとう」と伝えたい。あの日の実習が、私の教員人生のスタートラインだった。この原点を忘れずに、これからも子どもたちとともに成長し続けていきたい。